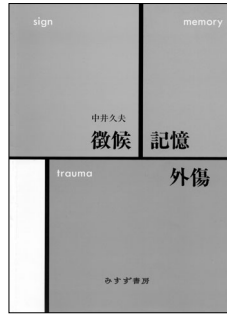


ヴァージニア・ウルフ^①によれば、書評の役割とは人々が自由とその本を読むか読まないか決めることを手伝うことであり、また、評者が著者に向かって読体験を語りかけるようなものが理想的だという。これはあくまで小説の書評についてのことなのだが、私はここでウルフがいうところに従い、本書の読体験を著者と人々に向かって語ろうと思う。そして、もしこれが本書と人々との出会いのきっかけになれば、幸せ

どいながらも楽しんでいてふと、自分がもう”中井ワールド“にいることに気づく。



中井久夫著 『徴候・記憶・外傷』
 (みすず書房・二〇〇四年三月)

垣口 佐保

中井久夫の文章は液体のようであり、ふれると浸透圧が生じて私の細胞の温度や密度が変化する。文章の流れに身を任せたり泳いでみたりするうちに、私のあらゆる感覚が研ぎ澄まされてゆく。そしてそれをとま

に思う。

「頭の中の対話」

中井久夫は、精神科医であり人間科学の教授であり、また考え感じることの達人である。著者にとって「初山踏み」とされる本書では、読者もまた、期待と不安が入り混じった心地よい緊張を感じながらさまざまな「発想のうつろい」に参加することになる。「世界における徴候と索引」では、アカシアの木立の匂いによつてある「記憶」が呼び起こされたという経験から、いまだ到来していないものと過ぎ去ったもの、そして現在あるものとの関係についての思いがめぐらされる。そこで著者は、「索引」という、過去から記憶が現前するときの手がかりのようなものがあることを思う。ここで紹介される「徴候」や「予感」また「索引」や「余韻」といったものたちは、私たちが生きるこの世界や記憶というものをめぐる壮大な物語の登場人物のようである。こうした著者の発想に引き込まれてゆくと、私はある異次元空間にいるような無重力感を味わった。

ここで著者の発想が、「頭の中の対話」という対話形式で展開されるところがおもしろい。著者はこの対話形式について、「私の発想が、存在と非在との間を揺れ動いている時期を、もっとも忠実に再現するものと思う」と、述べる。つねづね著者の頭の中はどうなっているのだろうかと思っていた私に

※甲南大学大学院人文科学研究科 博士後期課程在籍

とって、この「頭の中の対話」はとても興味深かった。そして、発想や考えがふくらみ展開する過程とは、なるほどまさに、対話のようなものなかもしれないと思った。ふと、サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』が思い出された。そこではゴドーと呼ばれる人物がやって来るのを待っている二人の男の対話を中心に、さまざまな人物が現われたり去ったりして物語が展開してゆく。「頭の中の対話」によって発想や考えがだんだんに展開してゆくことは、そしてとうとうそれからついに、結論や理論と呼ばれるような具体的な形を帯びたなにかが現われるのを待っているのに似ている。そうした本場に現われるのかどうかさえもわからないようなものが現れるのを待ちつつ、対話は無限に続いてゆく。考えることは対話することであり、考えることの面白さは、この対話の無限性にあるのだろうと思う。

外傷（トラウマ）性記憶

「トラウマとその治療経験」には、「私が事例報告を行うのは極めて例外的」という著者の、精神科治療事例が盛り込まれる。たとえば、幻聴だと思われていたものが聴覚性のフラッシュバックであることが判断された事例では、統合性失調症の幻聴と外傷性幻聴とでは治り方がちがうことが指摘され、著者はそれを後者が、「外傷性の記憶」に関係しているためだと述べる。一般的な記憶が、暦時間の流れる構造（クロス的・垂直軸）と、また現在を中心とする同心円的構造（カイロスの・水平軸）との二重構造の中である一体性をもつ

のに対し、「外傷性の記憶」にはこうした一体性がない。それは、生きることの文脈に組み込まれない記憶なのだ。

外傷（トラウマ）性の記憶は治療によって「消える」のではなく、やがて「間遠になり」、インパクトが少なくなっていくと著者はいう。著者は、そのようにインパクトが少なくなる過程について、開くと絵がとび出すしかけの絵本が、絵のとび出さない普通の絵本になるような感じ、と表現したこともある。私は「なるほど」と思って、その表現をカウンセリングの中で拝借して相手に伝えたところ、ものすごくよくわかる、と納得された。ところでこのように著者が好んでよく使う表現というものがあり、本書のなかでもそのいくつかに何度かくり返し出会う。こうした著者お気に入りフレーズを、「前にも聞いたな」と、うけ流してしまっても非常にもったいない、ということについて、ここでどうしても少し書いておきたい。これは、私が大学で著者の講義を受けていて感じたことでもある。文章や講義の中で著者お気に入りフレーズと出会ったとき私は、これまた著者がいつもよく使う、「やあ」という挨拶を思い出す。「やあ」「またお会いしましたね。よくお会いしますね」「そうですね」「云々。こうして、出会うたびにそのフレーズとだんだん馴染んでゆき、「ところで、あのおう、以前からお聞きしたいと思っていたのですが……」と、話しかけられるほどになり、そのフレーズについての理解がだんだん深まる。そしてとうとうそのフレーズを拝借して、自分でも使ってみるといえることができるようになるのだ。

マニユアルとスキル

「医学・精神医学・精神療法は科学か」では、いわゆる科学が向き合うのは「対象」であるが、医学が向き合うのは、完全に対象化できないもの（たとえば人間）であることが指摘される。さらに、「対象」のデータから法則を定立する科学の「術」はマニユアル化できるが、対象化できないものに向き合う医学が用いる「術」はマニユアル化して伝えることができないため、実践的に身につけるしかない性質のものであるとし、これを「スキル」とよぶ。

学生の間ではしばしば、著者の講義はノートが取りにくいとか、著者の本を読んでなんとなく何かつかんだような気がしても、それがいつのまにかすつとすり抜けてしまう、ということが話題になる。それは著者の伝えるものが、スキルのものだからだろうと私は思う。マニユアルから学ぶ場合と違い、スキルを学ぼうとする場合には、学ぶ側にある特別な態度が求められるのだと思う。その特別な態度とは、伝えられる内容だけでなく伝える側の姿勢や動き、またそれらをとりにまく雰囲気を感じ取ろうとする注意、さらにそれを自分も真似してやってやろうという意気込みのようなものであろう。

たとえば、本書に収められた「踏み越え」という論文で、筆者は暴力や犯罪に至る過程に、「段階」があるのではないかということ述べる。その「段階」を越えるときの「踏み越え」という現象について説明するところで、著者は、ジャーナリスト柳田邦夫による事故学に関する文献を参照する。そして、飛行機事故にも段階があるらしい、というふうにとさら

りと表現する。このあたり。そう、こういうあたりが、著者について、ああ、まったく広いわあ、と感じさせられるところの一つである。著者は心理学を学ぶ学生に、「心理学の本ばかり読んではいけませんよ」と、微笑みながらささやく。「心理学は人間に関することなのだから」と。人間自体ということ、世界の歴史や地理や情勢、また言語。そうしたさまざまな分野に関心を向け、そこに自分が何をどう見出すか、何を思うか感じるか。本書の中で著者の考える姿勢や動きを読みとろうとするとき、学問というものの面白さとそれを楽しむための「スキル」を学ぶことができると思う。

事実と真実

犯罪や病いについて著者は、「私も犯すかもしれないもの」、また「自分もなるかもしれないもの」と考えている。そうした姿勢で犯罪者や病者に向き合う筆者の事例報告は、読む者の心に鋭くまっすぐ突き刺さる。「高学歴初犯の二例」に挙げられた犯罪の事例は、精神科医である著者が助言者として、また鑑定人として関わったものであるという。ここには、被告とされる人の生い立ちや性格、家族の関係、そして事件発生までの経緯を心理的段階的にとらえた視点とともに、それを鑑定として報告する公判での著者の姿が描かれる。

裁判において、事実というものの、またいわゆる真実というものもつ力の大きさと恐ろしさを、私は感じた。「被告が納得して刑に服すことのできる、被告の心情を汲んだ判決文を」と、強く願う著者の、ふだん私を知る優しく穏やかな物腰か

らは想像しがたいほど猛烈に激しく熱く、毅然とした姿を目にして、私はとても興奮した。ベストセラー小説や映画の批評によくある、「涙が止まらなかった」の類の表現を私はどちらかというところ嫌悪する性質であるが、ここではそうした表現をすら使つてしまいたい気持ちになる。私は、その圧倒的なリアリティに全身の毛穴が開きっぱなしであった！

事実とは、そして真実とはいったいなんなのか。それは、”実際に起こったこと。その人の気持ちや考えだけでは動かすことのできない真の事柄“と一般に定義される。しかし、この世界に果たして本当にそんなものがあるのだろうか。この”事実“という言葉がごく自然に使われていることに、私は今さらながらに恐怖を感じた。そしてそのとき、一人の人間の気持ちや考えをも一つの真実として受け取ることがいかに特殊で重要であるかということをも、改めて痛切に感じた。心理カウンセラーが人々と関わる時、心理面接の場が非現実的な空間であるということがしばしば強調される。しかし、一方で忘れてはならないとても重要なことは、カウンセラーとして私が向き合っている人々は皆、圧倒的なリアリティを持って生きていく一人の人間である、ということなのだと思ふ。

全体をとらえること、分類すること

さて、本書の中でさまざまなものを分類している著者であるが、「身体多重性」では、多重性の究極形の一つではないかと思われる。“身体”を、「ちよつと多すぎるか」と言いながらも、二八に分類する。

分類とは、あるものをさまざまな視点から分けてみることによつて、逆説的に、その全体をとらえようとする作業であると思ふ。物事の全体をとらえようとするとき私たちは、物理的にはそれこそ一つの身体しか持ちえないけれども、さまざまな点から対象を眺めようとする。しかしここで、著者がいうように、「全体的であろうとすれば抽象的たらざるを得ず、具体的なものには必ず部分的であるというのが、私たち人間の世界認識の限界」なのであり、あるものの全体を完全に理解することはできない。このとき、分類することは、全体をとらえるために行われることなのだろう。著者も「まだまだたくさん出てきそう」というように、完全に分類しえたと思つても、まだ別の側面が残されている。このように、分類することにはつねに有限と無限がつきまとうのであろう。

鷲田清一氏との「身体多重性をめぐる対談」でも、そのことがよくわかる。まだまだほかにもこんな身体ありますよと、鷲田氏が著者に提案するやりとりがおもしろい。さらにまたこの対談では、先にも書いたような対話の妙を体験できると思ふ。二人の対話を眺める視点から、対話がどこへ向かうのかをワクワク見守りつつ、同時にまた私の考えがこの対話の周辺をフラフラ漂う。そして対談が終わったあとも、私の「頭の中の対話」は続いてゆくのだ。

*

こうしてさまざまな主題の海を漂いつつも、本書は、読者が波にのまれたり渦におぼれたりしないようにできているように思ふ。著者も前書きで触れているように、本書にいくつ

か織り込まれる講演の語りかけ調文章が「ゆるめ」としては
たらき、読むものに安心感を与えるのかもしれない。また、
それぞれの論文が長すぎない分量であり、主題ごとに区分け
されていることで落ちつくのかもしれない。ふと表紙をみる
ところにも区分けがあつて、タイトルの主題が黒い線で分け
られている。これは、表紙やタイトル文字のデザインにも凝
る著者による案であろうか。どこまでも続く果てしない海に
岸辺としての線と区分けが示されていることは、中に入る者
を安心させるだろう。私は、表紙の線と区分けから、手すりつ
きブルド（ただし、深さ不明）を連想した。皆さん、”中井
ワルド”は、専門的知識をもたずに身を浸しても大丈夫で
す。ちゃんと、手すりがついています。

註

(1) ヴァージニア・ウルフ『病むことについて』川本静子編
訳、みすず書房、二〇〇二年、四六頁。

(かきぐち さほ・臨床心理学)

